

【論文提出者】 小崎 太一

【論文題目】 郭沫若・陶晶孫を中心とした中国現代文学の唯美主義と表現主義の研究

【授与する学位の種類】 博士（文学）

#### 【論文審査の結果の要旨】

小崎太一氏の「郭沫若・陶晶孫を中心とした中国現代文学の唯美主義と表現主義の研究」は、初期創造社を代表する二人の文学者、郭沫若と陶晶孫について、彼らの表現技法と創作に向かう姿勢に着目して論じたものである。郭沫若と陶晶孫は、同時期に九州帝国大学で医学を学び、ともに日本人女性と結婚し、しかも二人の妻が姉妹であるという関係にあり、九州帝国大学在学中に相前後して文学活動を開始させている。この多くの共通点をもっていた二人の文学者が、一方はプロレタリア文学に向かい、一方はモダニズム文学への傾斜を深めていくその分岐に何があったのかを探ろうとしたのが本論文である

小崎氏は第一章前半でまず、陶晶孫が創作を開始した福岡在住時代に焦点をあて、この時代に陶晶孫が執筆した一連の作品に共通して現れる「夜」「水」「死」に着目する。氏の考察によれば、陶晶孫は当時の日本文壇に流れていたデカダンの風潮に影響を受け、こうした世紀末芸術的な唯美主義的傾向の作品を創作したのだという。陶の作品のモチーフと世紀末芸術との関連については、これまで十分には検討されておらず、本論文は新たな知見を示していると評価することができる。

ついで第一章後半部では、郭沫若の初期のロマン主義的文学と「水」との関係について詳しく論じている。九州帝国大学時代の郭沫若は、寓居の裏に広がる箱崎海岸を毎日のように訪れ、郭沫若自身も、当時の彼のほとんどの作品がそこで生まれたことを認めているという。氏によれば、郭にとって「水」は自然との調和を象徴するものであり、生命の再生の場でもあると認識していたという。小崎氏はさらに、郭の「水」に対する深い関心を明らかにするため、郭の第一高等学校予科時代や第六高等学校時代の水泳体験にまでさかのぼり、多くの伝記的事実の掘り起こしをも行っている。

第二章では、陶晶孫に視点を戻し、彼が初期の唯美主義的傾向から表現主義的傾向へと転じた過程を丹念に追っている。氏によれば、陶晶孫は彼の日本滞在中に起きた関東大震災ののちに日本文壇に生まれた一連の震災後文学に大きな影響を受けるとともに、彼が少年時代を過ごした東京という「故郷」が壊滅したことに衝撃を受け、それまでのある意味で観念的とも言える作風から、より現実的な作風へと転換したという。しかしそれは、彼がリアリズム文学に向かったということではなく、従来の唯美主義的傾向が姿を消し、日本のモダニズム文学の影響を受け表現主義的傾向を強めていったのだと氏は主張している。氏は、震災後の作品中の表現を数多く例示し、陶は合理主義的、機械主義的な表現を意識的に用いているのだと説いている。氏によれば、このような陶の姿勢は、当時の中国文壇にはついに受け入れられることはなかったものの、陶晶孫の文学は、中国現代文学の主流であったプロレタリア文学とは違う可能性を秘めていたと高く評価している。

第三章は第二章までを補強するものであるが、そのなかでも、東京で展開していた当時の中国人留學生の愛国運動の主流とずれを生じていた郭沫若・陶晶孫にとって、福岡が悲哀を含みつつも安らぎを与えてくれる場であったとの立証は、これまで明らかにされていなかった歴史的事実に光を当てるものである。

論文の構成にはまだ改善の余地があるように感じられるが、先行研究を踏まえた手堅く丹念な論証や、独創的な視点から二人の作家の文学的営みの解明しようとした試みは高く評価することができる。以上の所見から、本論文は学位論文として十分な水準に達していると判断する。

### 【最終試験の結果の要旨】

審査委員会は、平成 22 年 6 月 18 日(金)午後 4 時から 5 時 40 分まで、文法棟社会文化科学研究科研究科長室において、小崎太一氏に対する口述試験を実施した。まず、論文のもつ学術的主義や独創性、論文全体の概略などについて当人から説明があり、ついで審査委員から論文の内容や表現についての質問等がおこなわれた。質疑に対して、小崎氏は一つ一つの確に回答をおこなった。

さらに、平成 22 年 6 月 28 日(月)、くすのき会館レセプションルームで開催された学位論文公開発表会において、小崎氏は自らの学位論文の概要について発表をおこなったのち、出席者と質疑応答をおこない、専門とする領域について優れた学識を有していることを示した。

以上のことから、本審査委員会は、小崎太一氏は自らが専門とする研究領域について豊かな学識を有し、自立して研究を行う能力が十分にあると判断し、博士（文学）の学位を授与するに値すると判定した。

### 【審査委員会】

主査 吉川 榮一  
委員 森 正人  
委員 千島 英一  
委員 福澤 清  
委員 坂元 昌樹